

日本看護歴史学会

会報

日本看護歴史学会
第 19 号
1994年10月1日

戦後五十年を前に思うこと

隅田川の花火と東京大空襲

鵜沢陽子

平成六年七月、第二十回日本看護研究学会の帰途、総武線の電車の窓越しに華やかな隅田川の花火を生まれて初めて垣間見た。

私の座席の前には新宿駅から乗車した色鮮やかな浴衣姿の若い女性数名が、賑やかに楽しげにお喋りしながら両国駅で下車した。

敗戦から四十九年、林立するビル、高速道路、屋形船、敗戦時の痕跡は今や全く跡形もない。

しかし、私には五十年前の消し難い記憶が昨日のことのように鮮明に甦る。

昭和十九年八月、国民学校四年生の兄を集団疎開で見送った両国駅。同二十年三月九日夜の大空襲、

母と共に避難した指定の二葉国民学校。一挙に押しかけた避難民で満員電車さながらの校庭。

母の瞬時の判断で震災記念堂へ再避難。人影もない庭内の区役所側の入口に佇み、火の粉を払いながら見つめ続けた次々に燃え上り、焼け落ちた家々。

十日、燦んだ太陽、目も開けられぬ強風、一望千里と化した焼野原の中を乾パンの配給を受けるためにアサヒビール株式会社まで清澄通りを北上した。焼跡に散乱する焼死体。全身真白な包帯に包まれた負傷者達。

十二日、隅田川から引き上げられた多数の遺体が並べられた隅田

公園。父の遺体が見つかった同愛記念病院の死亡室。

隅田川の川岸に展開された悪夢のような光景、私にとっての原風景がそれである。

四十年後、兄の集団疎開の引率教師の日記が教え子の協力で『藤葉記』（清水晃著）として出版された。書名は最初の疎開地千葉県の葉、再疎開地岩手県藤沢町の藤からとって命名されていた。

この書で再びあの夜の二葉国民学校の惨状を知ったのである。東、南、西（正門）門の開門と同時に殺到した千人もの避難民。

火は強風に煽られてコの字型、三階建校舎の南西角に襲いかかり西、南、北側校舎へと、更に避難民の荷物に燃え移り、「学校は大きな火の塊となって……」人々は熱風・焦熱から逃るためにプールになだれこんだ。やがて、「プールの中は動かない人で全く水も見えない程に……」「焼死者は校庭

の講堂附近と玄関口に累々として目をおおうばかり……」と一夜にして水泳王国二葉のプールも学校も墓地と化してしまったのである。

玄関口から逃れなかったら私も辿った運命である。日記は更に疎開地での緊迫したあの日の状況も伝えている。

次々と入る家族の消息、悲報。いずれにしてもこの悲劇をもたらした近因・遠因、その是非の究明と悪夢の再現の防止を考え続けることは生き残った人間の、人間としての当然の責務と思う。

村山首相は東南アジア歴訪後、来年の戦後五十周年を意義ある節目の年とするために、二本の柱から成る「平和友好交流計画」を提唱。その第一に過去の歴史を直視するため、歴史図書資料の収集、研究者に対する支援等歴史研究事業をあげている。（平六・八・三一）

これからのかという思いもあるが、国際社会に生きるこれからの、戦争を全く知らない人達のためには不可欠な国の遺産としての事業と思う。

臨床看護婦の時代、多くの患者の臨終に立ち会った。家族、親族、職場の同僚、先輩、後輩、友人、医師、看護婦に看取られながらの人間らしい人生最後の儀式。この場に臨んでいつも脳裏に去来したのは、あの原風景にいる死者達であり、父の臨床である。

あの空襲体験者にとって、夏の夜空を彩る華麗な花火に心から酔いしれる日はあるのであろうか。私の記憶は一向に風化しない。

日本看護歴史学会
第八回総会報告

亀山 美知子

去る八月一九日、東京大学山上海館大会議室において、本会の第八回大会総会が開催された。冒頭で議長団選出を行ない、山本捷子、福本恵両氏が任に当った。

一九九三年度（一會計年度は八月〜七月）決算、一九九四年度予算案はいずれも承認された（別項）。

一九九三年度の活動および事業報告については、一八七四年八月に医制が發布されたことを記念し、「産婆一二〇年」として大会開催を行なうとともに記念テレカの作製と販売を行ない、現在までに三千五百枚を作製した。また、八月に関西で初の学習会を開催した。

機関誌『日本看護歴史学会誌』の発行は、この数年遅配が続いたが、予定の発行期日の出版に返ることができた。加えて、ISBNの登録が行なわれ、研究誌としての体裁が整えられた。鶴沢・草刈両幹事の努力に負うところが大きい。

一九九四年度活動方針および事業方針について

一九八七年創設の本会は、二年後に設立二〇年目を迎える。このた

め、一部には学術団体への加入を求める声も聞かれるが、現状はその域には遠く及ばない。すでに数年来、研究的体質の向上を目指してきたが、今後の会の維持発展のためにも、若年の研究者の育成を目指したい。

次に事業としては、来年が「戦後五〇年」の節目の年に当るため、各界で様々な取り組みがなされるであろうが、本会としても看護史上の検証・提言を考えたい。

また、前述のとおり、具体的な研究体制強化を目標として、各地での学習会の開催等を積極的に実施したい。なお、今春以降、広島近畿で学習会を開催している。

来年度の第九回大会の開催予定地は、京都が候補地となった。

会場より質問のあった本会会員数は約二六〇名であったが、大会会期中に二七八名となった。なお、次年度の会計監査は大村・徳川氏。

◆第八回大会実施協力の御礼

杉本郁子氏、吉川龍子氏、花島俱子氏、滝岡隆子氏、小山千加代氏、大村春子氏（順不同）の各氏および非会員中島・高橋氏の御協力を得たので、紙面を借りて御礼を申し上げる次第である。

日本看護歴史学会 1993年度会計報告

収入の部

(単位:円)

項目	予算額	決算額	差し引き額
前年度繰り越し金	792,417	792,417	0
会費	600,000	579,000 会 員127口 新入会員 18口	▲21,000
寄付金その他	10,000	76,354 会誌等売上(70,966) 利息 (5,388)	66,354
合計	1,402,417	1,447,771	45,354

日本看護歴史学会 1994年度予算案

収入の部

(単位:円)

項目	予算額	備 考	前年度決算額
前年度繰り越し金	436,650		792,417
会費	600,000	150名×4,000	579,000
寄付金その他	30,000		76,354
合計	1,066,650		1,447,771

支出の部

(単位:円)

項目	予算額	決算額	差し引き額
事務経費	200,000	332,238	▲132,238
印刷費	(40,000)	(26,205)	
通信費	(150,000)	(224,742)	
その他	(10,000)	(81,291)	
幹事会開催費	150,000	116,053	33,947
出版費	300,000	283,250	16,750
会報発行費	(100,000)	(82,400)	
		16号 41,200	
		17号 20,600	
		18号 20,600	
学術誌発行費	(200,000)	7号(200,850)	
会員名簿費	0	0	0
総会費	50,000	50,000	0
分科会費	20,000	2,980	17,020
予備費	682,417	226,600	455,817
		学会誌6号印刷費	
合計	1,402,417	1,011,121	391,216

次年度への繰り越し額

収入額1,447,771円-支出額1,011,121円=436,650円

支出の部

(単位:円)

項目	予算額	備 考	前年度決算額
事務経費	240,000		332,238
印刷費	(40,000)		(26,205)
通信費	(150,000)	会報3回 学会誌1回	(224,742)
文具、その他	(50,000)		(81,291)
幹事会開催費	150,000		116,053
出版費	300,000		283,250
会報発行費	(100,000)	年3回	(82,400)
学会誌発行費	(200,000)	年1回	(200,850)
会員名簿費	0	1回/3年	0
総会費	50,000		50,000
分科会費	20,000		2,980
予備費	306,650		226,600
合計	1,066,650		1,011,121

会計監査 大村春子 ㊞

